

予言のテキストとサブテキスト

——『マクベス』におけるインターテクスチュアリティ

小 林 潤 司

0 はじめに

ウィリアム・シェイクスピアの悲劇『マクベス』で、「女から生まれた者は誰もマクベスに危害を加えない」という予言によって天下無双を保証されていたはずの主人公は、「切り裂かれた母の子宮から時ならずして引き出された」マクダフに打ち負かされる。

「帝王切開によって生まれた者は女から生まれたことにはならない」という、この一見不可解な論法を、当時の医療事情という背景と『ハムレット』の墓掘りの場というサブテキストを参照して合理化する加藤の読みは十分に説得的だ。しかし、この解釈を受け入れたとしても、もうひとつのサブテキスト「およそ女から生まれた者のうち、洗礼者ヨハネより偉大な者は現れなかった」（マタイによる福音書11章11節）によって観客／読者の内に胚胎した、（女からではなく処女から生まれた）救世主降臨への期待は「裏切られた」（あるいは「あれはまったくの見当違いだった」）と言いつけるものだろうか？ この問いに、可否いずれかの答えを断定的に与えることはむずかしい。

本論のねらいは、現実世界のロジックでは必ずしも割り切れない、戯曲テキストの意味生成の複雑なプロセスの一端を、インターテクスチュアリティという観点から解明することである。

1 「女から生まれた者は」

『マクベス』第1幕第3場。反乱軍を打ち負かしたグラームズの領主マクベスは、戦場からの帰還の途中で、三人の異様な風体の女たちから奇怪な挨拶を受ける。

1 WITCH All hail Macbeth, hail to thee, Thane of Glamis.

2 WITCH All hail Macbeth, hail to thee, Thane of Cawdor.

3 WITCH All hail Macbeth, that shalt be king hereafter.

第一の魔女 万歳、マクベス、万歳、グラームズの領主。

第二の魔女 万座、マクベス、万歳、コーダーの領主。

第三の魔女 万歳、マクベス、いずれは国王になるお方。（1幕3場48-50行）¹

キーワード：シェイクスピア、ホリンシェッド、新約聖書、マタイによる福音書、帝王切開

¹ シェイクスピアの作品からの引用はすべて第3アーデン版の一卷本全集（Shakespeare）に拠る。引用に付す日本語訳は拙訳。

ほどなく、反乱軍平定の功勞への褒賞として、謀反人として処刑されたコーダーの領主の位がマクベスに授けられたという報せが届くことによって、「万歳、コーダーの領主」という「予言」は的中する。² こうなると、「いずれは国王になる」という託宣も実現するのでは、という期待が膨らむのも無理はない。その期待を共有する妻（マクベス夫人）の強い唆しも抗し難い推進力として作用し、マクベスは、これまで忠実に仕え、その信頼を勝ち取ってきたダンカン王の謀殺へと歩を進めていく。

「万歳、コーダーの領主」、「いずれは王になるお方」にしても、同じ時にバンクォーに向かって魔女が告げる「王たちを生むが、自分は王にならぬ (Thou shalt get kings, though thou be none)」(67行) という託宣にしても、予言というものが元来持っているいかがわしさ、胡散臭さはあるとしても、それらが言葉として指していることの意味はよくわかる。予言の陳述それ自体の明快さに加えて、その予言が実現したか否かの判定において、疑義が生じる余地がない（あるいは、比較的その余地が小さい）という意味でも、曖昧さのない予言であると言えるだろう。

いっぽう、ダンカン王の暗殺を実行し、国王になってからのマクベスが、三人の魔女が呼び出した幻影から授かる予言はどうだろうか。

2 APPARITION Macbeth, Macbeth, Macbeth.

MACBETH Had I three ears, I'd hear thee.

2 APPARITION Be bloody, bold and resolute: laugh to scorn

The power of man, for none of woman born

Shall harm Macbeth.

Descends.

第二の幻影 マクベス、マクベス、マクベス

マクベス たとえ耳が三つあったとしても、すべての耳を傾けて聞こう。

第二の幻影 流血をものともせず断固進め。人間の持つ力など

一笑に付すのだ。女から生まれた者は誰も

マクベスに危害を加えないのだから。 下降して退場。 (4幕1場76-80行)

この「女から生まれた者は誰もマクベスに危害を加えない」という予言は、この直後に出てくる「大いなるバーナムの森が、高く聳えるダンシネーンの丘に向かって攻め寄せるまでは、マクベスは打ち負かされない (Macbeth shall never vanquished be, until / Great Birnam Wood to high Dunsinane Hill / Shall come against him)」(91-93行)と同様、普通に考えれば、「たとえお天道様が西から昇ろうと」のような慣用句がそうであるように、絶対にありえないことを引き合いに出して、「決して(マクベスは打ち負かされ)ない」というマクベスの天下無双を保証する陳述として解釈できるし、現にマクベス自身もそのように解釈しているようである。劇の大詰めで、マルカムの軍勢が

² ひとつ前の場面(第1幕第2場)で、国王ダンカンは、マクベスのコーダーの領主への任命を宣言しているから、少なくとも観客/読者の認識では、これは「未来の物事を推測して言うこと。また、その言葉」(『広辞苑』「予言」①)という意味での「予言」とは言えない。「万歳、コーダーの領主」という魔女の挨拶を聞いた後で任命の報せが届いたため、経緯を知らないマクベスには「予言が的中した」と思えるだけのことである。

押し寄せ、いよいよ進退窮まっても、まだこの「予言」を「天下無双の保証」として心の支えにしているほどである。

MACBETH Bring me no more reports, let them fly all;
Till Birnam Wood remove to Dunsinane,
I cannot taint with fear. What's the boy Malcolm?
Was he not born of woman? The spirits that know
All mortal consequences have pronounced me thus:
'Fear not, Macbeth, no man that's born of woman
Shall e'er have power upon thee.' [..]

マクベス 戦況の報告はもうたくさんだ。逃げたいやつは、みんな逃げればいい。

バーナムの森がダンシネーンに向かって動き出すまでは、
おれは一点の恐れも抱くことはない。マルカムの小童^{こわっば}がどうした？
やつは女から生まれたのではないのか？ 全人類の運命を知る
物の怪どもが、おれにこう告げたのだ、
「恐るな、マクベス、女から生まれた者は誰も
お前を倒せない」(以下略)

(5幕3場1-7行)

しかし、改めて言うまでもなく、これらの「予言」の「意味」は、結局最後には覆る。バーナムの森は動き出し(たように見え)、マクベスはマクダフに打ち負かされる。つまり、いずれの陳述もマクベスの「天下無双の保証」ではなかったのだ。森が動き出したのは、木の枝でカムフラージュした兵士たちの進軍が遠目に森が動き出したように見えたということで理解できなくもないのだが、問題はもうひとつの方だ。戦場でマクダフと相見えたマクベスは「女から生まれた者は誰もマクベスに危害を加えない」の予言を盾に、自分は無敵だとうそぶくが、相手はすかさず切り返す。

MACBETH Thou lovest labour;
As easy mayst thou the intrenchant air
With thy keen sword impress, as make me bleed.
Let fall thy blade on vulnerable crests;
I bear a charmed life, which must not yield
To one of woman born.

MACDUFF Despair thy charm,
And let the angel whom thou still hast served
Tell thee, Macduff was from his mother's womb
Untimely ripped.

マクベス 所詮、無駄骨に終わるぞ。

空気は切り裂けないものだから、その鋭い剣をもってしても
傷をつけることはできまい。このおれも同じこと。

どうせなら、刃で傷つけられる相手の脳天に振り下ろすがいい。
おれの命にはまじないがかかっている。女から生まれた者に
やられることはないのだ。

マクダフ そんなまじないは諦めろ。

お前がかしづく邪霊に伺いを立ててみる、
マクダフは、切り裂かれた母の子宮から
時ならずして引き出されたと教えてくれるから。

(5幕8場8-16行)

この一喝を食らったマクベスはすぐに「俺の男としてのより良い部分 (= 勇気) は怖気づいてしまった (it hath cowed my better part of man)」(18行) と言って、自分から「予言」による「天下無双の保証」が無効であることを簡単に認めてしまう。「切り裂かれた母の子宮から時ならずして引き出された」、つまり帝王切開によって生まれたというマクダフの出生をめぐる^{アナグノリシス}認知が、「女から生まれた者は誰もマクベスに危害を加えない = マクベスは天下無双」の等式を一瞬にして打ち砕くことで急転をもたらすのである。^{ペリペテイア}

2 予言の謎解き

「帝王切開によって生まれた者は女から生まれたことにはならない」という、この一見不可解な論法について、かつては、主たる材源であるホリンシェッド (Raphael Holinshed) の『年代記』(*The Chronicles of England, Scotland and Ireland*) の記述を踏まえ、「生まれた (born)」のではなく「切り裂き引き出された (ripped off)」という対照で理解するのが通例であった。³ ホリンシェッドで、マクダフはマクベスに向かって、抜き身を手に次のように言い放つ。

It is true Makbeth, and now shall thine insatiable cruelty have an end, for I am even he that thy wizzards have told thee of, who was never borne of my mother, but ripped out of her wombe: [..].

なるほどな、マクベス、だがお前の飽くなき残虐無道もここまでだ。このおれこそがまさに、お前の魔女どもの言い草にあったというその張本人、母から生まれたのではなく、その切り裂かれた子宮から取り出された男なのだから (以下略)。⁴

「母から生まれたのではなく (never borne of my mother)、その切り裂かれた子宮から取り出さ

³ たとえば第2アーデン版 (Muir) は「おそらくはホリンシェッドに依拠したのであろう (he probably relied on Holinshed)」(159頁) と注する。加藤によると、「これまで (引用者注: 加藤の刊行は2002年だから、それ以前ということ) 日本で出版された既訳もすべて」この解釈に基づいているという (140頁)。

⁴ Bullough, vol. 7, p. 505. 日本語訳は拙訳。

れた (but ripped out of her wombe)」という “never A but B” の相関構文はそれ自体が、「帝王切開によって生まれたものは女 (母) から生まれたことにならない」というロジックの説明になっている。その「従来の解釈」に一定の合理性があることは認めながらも、「払拭できない後味の悪さ」があると異論を唱えたのが加藤である (138頁)。

加藤は、材源テキストの記述を一種の枠にして解釈の幅を限定してしまうのではなく、同時代の観客／読者が想起した別のコンテキストやサブテキストがテキストの意味生成のプロセスに関与した可能性に目を向ける。新ケンブリッジ版 (Braunmuller) の注釈にある「帝王切開によって常に母親は死んだ (Caesarean section always killed the mother)」という記述に注目し、中世から初期近代にかけてのヨーロッパの医学文献から当時の医学事情 (「(当時) 帝王切開という大手術は母親の生命を救う目的も希望も持ちようがなかった。——女は、確実に死んだのだ」)⁵ を明らかにした上で、マクダフは帝王切開で生まれたゆえに、出産時には母親は死んでいたから、「女」から生まれたことにならないというロジックを読み出している。さらには、「死体から産まれたということは、女から産まれたことにならない」という理路の背後にはサブテキストとして、『マクベス』の先行作品である『ハムレット』の墓掘りの場の一節が作用した可能性があるとして指摘する。

HAMLET What man dost thou dig it for?

GRAVEDIGGER For no man, sir.

HAMLET What woman, then?

GRAVEDIGGER For none, neither.

HAMLET Who is to be buried in't?

GRAVEDIGGER One that was a woman, sir; but, rest her soul, she's dead.

ハムレット どここの野郎の墓を掘っているんだ？

墓掘り 野郎ではございません。

ハムレット じゃあ、どこの女だ？

墓掘り 女でもございません。

ハムレット 誰が埋葬される墓だ？

墓掘り かつて女であった者でございますが、もう死にました。その御霊の安らかならんことを。
(『ハムレット』 5幕1場128-34行)⁶

墓掘りが掘っているのは、男のでも女のでもなく、「かつて女であった者」のための墓だという。つまり、生きていた間は男女の違いはあっても、死体はすでにモノであり、もはや男でも女でもないという理屈である。

『ハムレット』の初演は1600年ごろと推定されている。『マクベス』の推定創作年代は1606年だから、約6年前の作品ということになるが、『ハムレット』はクォーター版が1603年 (不良本)、1604～5年 (善良本) に刊行されていることから、たびたび再演される人気の演目だったと考えられる。

⁵ 加藤, 145頁。

⁶ 『ハムレット』からの引用はすべて、第3アーデン版所収の第1フォリオ版テキストに拠る。

そのなかのせりふがサブテキストとして機能したのではないかと加藤は考えているわけだ。

先行の自作のテキストが後発作のサブテキストとして機能するという仕掛けは、シェイクスピアにおいては決して珍しい趣向ではない。やはり『ハムレット』にある、ポローニアスのせりふ「私
が実際に演じたのはジュリアス・シーザーです。議事堂で殺されました。ブルータスが殺したので
す (I did enact Julius Caesar. I was killed i'th'Capitol. Brutus killed me)」(3幕2場99-100行)は、
初演でポローニアスを演じた役者が以前に『ジュリアス・シーザー』でシーザーを、ハムレット役
(リチャード・バーベッジ)がブルータスを演じていたことを踏まえた楽屋落ちであることは明白
で、このせりふによって、このあとポローニアスがハムレットによって殺害される展開を暗示して
いるわけだ。

さらに加藤は“equivocation”という語にも着目する。マクベスはバーナムの森が攻め寄せてき
た(ように見えた)時、魔女の「二枚舌 (equivocation)」を罵って次のように言う。

I pull in resolution, and begin
To doubt th'equivocation of the fiend,
That lies like truth: 'Fear not, till Birnam Wood
Do come to Dunsinane', and now a wood
Comes toward Dunsinane. Arm, arm, and out.

決意の手綱を引き締めると、
悪魔の二枚舌が疑わしくなってくる。なにしろ悪魔とは
真実めかした嘘をつくものだから。「恐れるな、バーナムの森が
ダンシネーンに攻め寄せるまでは」か。今や森は
ダンシネーンに向かっている。武器をとれ、出撃だ。 (5幕5場41-45行)

この“equivocation”という語は、墓掘りに言い負かされたハムレットがその機知の油断ならなさ
を評して言う「気をつけてものを言わないと、二枚舌にやられるぞ (We must speak by the card
or equivocation will undo us)」(5幕1場136-37行)にも見られる。シェイクスピアの全作品の中
でこの2箇所にはしか現れない“equivocation”という「キーワード」が「女から生まれた者には」
の謎を『ハムレット』と連結し、墓掘りの解答へとフィードバックされるのではないかと加藤
は推測している (147頁)。

『マクベス』の「女から生まれた者には」の予言の「謎」を、『ハムレット』の墓掘りの場という
サブテキストを参照して合理化する加藤の読みは十分に説得的だが、この解釈を受け入れた上で、
さらに考えてみたい問題がある。それは、この予言にかかわるもう一つのサブテキストをめぐる問
題である。

3 もうひとつのサブテキスト

改めて指摘するまでもないほど自明のことだが、魔女が呼び出した幻影がマクベスに授ける「女

から生まれた者には」の予言を聞いた初演の観客が、その場で反射的に想起するサブテキストがあるとすれば、それは『ハムレット』ではなく、マタイによる福音書の第11章であろう。

洗礼者ヨハネに遣わされた弟子たちがイエスの前に現れ「来るべき方は、あなたでしょうか (Art thou he that shoulde come?)」(11章3節)⁷と尋ねる。イエスは自分に具わった神秘的な治癒力について語ったうえで、「わたしにつまずかない人は幸いである (happy is he that is not offended in me)」(11章6節)とだけ答える。ヨハネの弟子たちが帰ったあと、イエスは群衆たちに向かって、洗礼者ヨハネについて、そして自らが持つ神秘的な治癒力について語り、自分こそが待ち望まれていた救世主であることを事実上認める。その一節がこれである。

Ueryly I say vnto you, among them that are borne of women, arose not a greater then Iohn the Baptist: Notwithstandyng, he that is lesse in the kingdome of heauen, is greater then he.

はっきり言うておく。およそ女から生まれた者のうち、洗礼者ヨハネより偉大な者は現れなかった。しかし、天の国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である。

(マタイによる福音書11章11節)

この言明は、ヨハネが地上でもっとも偉大な者であると宣言しているものと理解できる。その意味では「女から生まれた者たち」は「全人類」とイコールと考えられる。⁸しかしこの福音書の一節が、イエスの口から発されたことばであることを頭に置いて読めば、どうしても、別の含みを読み取らないではいられない。つまり、イエス自身が天(天の王国)から地上に遣わされたこと、「女」からではなく「処女」マリアから生まれたことを踏まえ、自分はその例外であり、ヨハネを凌ぐ存在であると宣言しているという読みかたである。この読みでは、「女」は、「男」(男性)に対する「女」(女性)という対照ではなく、「処女 (virgin or maiden)」に対する「女」(性的な経験を有する成熟した女性、妻)という対照で捉えられているわけだ。

イエスは、旧約聖書のなかでたびたび降臨が予言されていた救世主(邪悪なる迫害者たちを撃ち滅ぼし、善良なる民を解放するメシア)としてではなく、(例外なく罪人である)全人類を救済すべく、身代わりとなって十字架上で処刑されるキリストとしてこの世に現れた。「わたしにつまずかない人は幸いである」は、旧約で予示されていたメシアのイメージに収まりきらない新たな救世主としてこの世に遣わされた自分を見て「つまずく」(本質を見誤って不信に陥る)ことがない者は幸福であると言っていることになる。イエスの生涯は「救世主降臨の予言を、誰もが予想できなかった意表をつくり方で実現する画期的な救世主の出現」というパターンの説話になっている。この旧新約聖書を通して語られた「大きな物語」もまた、『マクベス』の「女から生まれた者」の予言のトリックを解釈する上でサブテキストとして作用することが期待されているのであろう。

⁷ 聖書からの引用はすべて主教聖書(The Bishops' Bible)、日本語訳は新共同訳に拠る。

⁸ 第3アーデン版分冊本(Clark and Mason)をはじめ、これまでの『マクベス』の刊本では、この一節を「女から生まれた者たち=全人類」というレトリックの典型例として挙げるのが通例。

4 救世主降臨への期待のゆくえ

ここまで見てきたことから、「女から生まれた者は」の予言の意味作用には、実は、一筋縄ではいかない、思惑違いと期待充足の複雑な交錯があることに気づかされる。

魔女が呼び出した幻影がマクベスに予言を授けた時、観客はマクベスと同様、そこに「天下無双」の意味を読み取る余地があることは間違いない。少なくとも、マクベスはそう読み取るだろうと考える。しかし同時に、迷信的で禍々しい魔女の幻影がキリスト教的な価値観とは対極的なものであればあるほど、余計にマタイによる福音書の「およそ女から生まれた者のうちで」の聖句を想起してしまう（極端なものから、反対側の極端を連想するのは、人間の自然な思考の動きである）。マタイによる福音書をサブテキストとして立ち上がってくる予言の解釈は、「マクベスを打ち負かせるのは、イエス・キリストのような天の王国から遣わされた救世主だけである。今時、そんな救世主が降臨するなんて考えられない。ゆえにマクベスを打ち負かすものは決して現れない。マクベスは天下無双である」といったところだろうか。もちろん、観客／読者は初めから、この「天下無双の保証」が何らかの形で打ち破られることを知っている（そうでなければ、この悲劇は終わらないから）。それがどのような形で打ち破られるかが観客／読者の関心の焦点になっていくのだが、この段階では、「イエス・キリストのような救世主が現れないと、この天下無双の保証は打ち破られないのか。でも、そんなことはまずありえないなあ」と思いつつも、旧約聖書で予言されていた救世主降臨は、(イエスの登場によって) 予想外の形で実現されたことを想起して、ここでも予想外の解決が待っていることを漠然と期待するかもしれない。

実は、観客／読者に対しては、このありえそうもない救世主降臨への期待をめぐって、その後、一度だけ、ちょっとしたナッジ（合図）が送られる。それは、イングランドの宮廷に亡命した王子マルカムとマクダフの対面の場面においてである。

MACDUFF What's the disease he means?
MALCOLM 'Tis called the Evil:
A most miraculous work in this good king,
Which often, since my here-remain in England,
I have seen him do. How he solicits heaven,
Himself best knows; but strangely-visited people,
All swol'n and ulcerous, pitiful to the eye,
The mere despair of surgery, he cures,
Hanging a golden stamp about their necks
Put on with holy prayers; and 'tis spoken,
To the succeeding royalty he leaves
The healing benediction. With this strange virtue
He hath a heavenly gift of prophecy,
And sundry blessings hang about his throne
That speak him full of grace.

マクダフ 何の病気のことでですか？

マルカム 「^{イーヴル}悪疾」と呼ばれる病い（瘰癧）のことだ。

聖なる国王が行う奇蹟的な癒やしの業を、
 ここイングランドに来て以来、幾度となく
 目にしてきた。天を動かすやり方を
 国王自身がもっともよく心得ている。奇病を患い
 見るも哀れなほど、全身腫れ上がり化膿し
 医者にも見放された人々を、王は癒すのだ、
 病人たちの首に一枚の金貨を掛けてやり、
 聖なる祈りを唱えて。聞くところによると、
 この癒やしの恵みを、後継の王たちに
 伝えていくという。この奇しき力に加えて、
 天与の予言能力や
 数々の神の祝福が玉座を飾りたて、
 王の英邁さを物語っている。

（4幕3場146-59行）

イングランドの宮廷で当時の英国王エドワード懺悔王（在位1042～66年。アングロサクソン時代最後の王で Confessor [懺悔王, 告解王] と称される）が病人の患部に手を触れて神秘的な治癒力を発揮したとされる逸話への言及である。「癒やしの恵み (The healing benediction)」や「天与の予言能力 (a heavenly gift of prophecy)」といった「奇しき力 (strange virtue)」への言及は、これらのパワーを代々継承する正統な王の系譜に属さない、不当に王位を篡奪したマクベスの非正統性を際立たせるための仕掛けであることは間違いないが、同時に、マタイによる福音書でイエスが語っている自らの神秘的な治癒力を、再び観客／読者に想起させるためのナッジとしても作用していることは見逃せない。魔女の幻影の予言に対しての「今時、救世主が降臨するなんてありえない。だからマクベスは無敵だ」という当初の暫定的な解釈に対して、エドワード王という、霊的なパワーを持つ君主のイメージを提示し、救世主（あるいは救世主的なキャラクター）の出現への期待を掻き立てていると考えられる。

「切り裂かれた母の子宮から時ならずして引き出された」マクダフの登場によって、予言による「天下無双」の保証は無効を宣言される。「女からではなく処女から生まれたキリスト」ではなく、「女からではなく死体から生まれたマクダフ」が、マクベスと観客／読者の期待を裏切り、マクベスを打ち負かす。そこでサブテキストとして作用しているのが『ハムレット』の墓掘りの場であることは改めて言うまでもない。

5 結び——期待は裏切られたのか？

以上のことを踏まえて、最後に考えてみたいのは、マタイによる福音書をサブテキストとして萌し、エドワード懺悔王のエピソードへの言及によって補強されていた「救世主降臨への期待」は、

単純に裏切られたと言い切れるものだろうかという問題である。

マルカムとマクダフという、劇のここまでの展開からは、観客／読者の全般的な共感を得ているとは言えないキャラクターたち（彼らほど、観客の嫌悪感を掻き立てる善玉キャラクターも珍しい）が劇の結末で、新王の指名（マクダフ）と王位継承の宣言（マルカム）を行なうという展開が、曲がりなりにも受け入れられるとすれば、表向きは期待外れに終わった「救世主降臨への期待」が、観客／読者の意識下では、マクベスを打ち負かしたマクダフとマクダフが王に指名するマルカムに「救世主」のオーラを幻視させるというかたちで作用しているからではないだろうか。

劇を見ている観客（戯曲を読んでいる読者）の頭のなかで起こる意味生成の作用には、現実世界のロジックだけでは割り切れない領域がある。『マクベス』の「女から生まれた者は」の予言をめぐる複数のサブテキストの作用を観察することで、「インターテクスチュアリティ」という概念が、一見不可解な劇（戯曲）の意味生成のメカニズムの解明の一助たりうる可能性を確かに見て取ることができる。

引用文献

- The Bishops' Bible : A Facsimile of the 1568 Edition*. Elpis, 1998.
- Braunmuller, A. R. editor. *Macbeth*, by William Shakespeare. The New Cambridge Shakespeare. Updated ed., Cambridge UP, 2008. Kindle ed.
- Bullough, Geoffrey. *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*. 8 vols. Routledge, 1957-75.
- Clark, Sandra and Pamela Mason, editors. *Macbeth*, by William Shakespeare. The Arden Shakespeare Third Series. Bloomsbury, 2015.
- Muir, Kenneth, editor. *Macbeth*, by William Shakespeare. The Arden Shakespeare (Second Series). Reprinted ed., Methuen, 1984.
- Shakespeare, William. *The Arden Shakespeare Third Series Complete Works*. Ed. Richard Proudfoot, et al. Bloomsbury, 2021.
- 加藤行夫「帝王切開と『女』の死——『マクベス』の謎解き」『シェイクスピア——世紀を超えて』日本シェイクスピア協会編，研究社，2002年，138-51頁。
- 新村出（編）『広辞苑』第7版，岩波書店，2018年。
- 『聖書 新共同訳——新約聖書 詩編つき』日本聖書協会，2007年。

付 記 本稿は、2021年10月16日にオンラインで開催された日本英文学会九州支部第74回大会のシンポジウム第1部門（イギリス文学）「演劇とインターテクスチュアリティ——シェイクスピア・地図・予言・ジェンダー・歴史書」のために準備した原稿に基づく。コーディネーターの大島久雄氏（九州大学）、登壇者の勝山貴之氏（同志社大学）、國崎倫氏（九州国際大学）との討論は、加筆修正を行う上で大いに助けになったので、ここに記して謝する。